KANAGAWA

NEWS LETTER 1991. 7 No.9

〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話(045)481-5661㈹ 神奈川大学言語研究センター

言葉探し／コード探し

日高　昭二

橋本治らが編んだ『消えた言葉』という本を開いたら、そこに昭和三十年代を通じて一斉に姿を消した言葉が並んでいて興味をひかれた。「盥」「蠅帳」「蚊帳」「卓袱台」などの言葉で、いうまでもなくこれらの言葉は、日常生活の変化にともなって消えた言葉であるが、ぼくらの世代では、それに対応するモノの記憶がまだ残っているから、その背景の説明にそれほど苦慮するわけではない。むずかしいのは、言葉の意味がどうにも気になるとともに、それがどうやらテキストのコード探しでもあるらしい、と気がつく場合なのである。

たとえば「卓袱台」という言葉。これで思い出すのは漱石の『こころ』で、「先生」が友人のKを出し抜いてお嬢さんとの結婚を申し込む、その翌朝の風景にこれが出てくる。「先生」とKの間にどんな事情があったかを知らない奥さんは、下宿人のKに「あなたも祝ってくださいな」と同意を求める。そこでKは「鉛のやうな飯を食べた」とされる、あの「卓袱台」である。

この「卓袱台」が、今で言う「ダイニング・キッチン」に取って代わられたことを言うのはやさしいが、しかしこの「卓袱台」の風景が、当時としていかに新しい風景であったかを、文化の起源として説明するのはなかなかむずかしい。それでこの場合の「卓袱台」(どうやらこれは「卓袱」=「しっぽく」料理からきたらしく、チャブは「卓袱」の中国音chuofuの転化ともいう)は、そのかたちが丸く、したがって席順に上下のない、それゆえに家族的な風景を作り出すのにはもってこいであったという、そういう小道具のコードから説き及ぶことにもなるのである。

これまでのように、文学テキストを「近代化」の理念や思想としてただ批評的に眺めるだけなら、こんな苦労はいらない。かりに「近代」に光を当てるにしても、それを解く鍵はむろん一つではなく、ましてや複雑な生き物である文学テキストには言葉一つにさえこだわりの種が隠されていることは言うまでもない。

樋口一葉のテキストに「離縁」という言葉はあっても「離婚」はない。そのことに気づくや、さてそれでは「離縁」がいつごろ「離婚」となったかと調べ出すと、これがなかなか厄介なことになるわけだ。「女性」という言葉もそうで、『国語大辞典』では明治十七年丸善刊行の『英和双解辞典』が初出例とあるが、最近の研究ではもう十年は遡れるらしい。もちろん言葉の起源が問題なのではなく、それが伝統的な「にょしょう」「にょにん」の観念からどれだけ離れているかが大事なことなのである。ついでに「新婚旅行」は「ハネムーン」の訳語だが、これも、明治二十年代の「甘月遊」からいくつかあって、ようやく昭和のはじめに鉄道網の整備とともに定着したもようである。この「ハネムーン」などは、実体的な背景のないところで移入された言葉であるから、その訳語が時代のなかでウロウロすることのほうにむしろリアリティがある。そのほかにも、これも今では死後の一つ「プロレタリア」という言葉なども、これは語源(ラテン語のプロレタリウス)からして複雑なコードを抱えているから注意が要る。

消えた言葉には、それに対応するモノが復元されればそれなりに解る言葉もあるが、それでも時代の気分まで復元するのは容易なことではない。「ズロース」を手近かな辞書で引いて「婦人用の下着の一」などと解ったところで何の意味もない。まして「貧乏」「深窓の令嬢」などという言葉を説明するとなると、ぼくなどは一週間かけてもしゃべり尽くせない。